

メイドさんと
ご主人様の



140文字日記

作 ARM1475



登場人物

・ご主人様

..... 28歳。いわゆるイケメン。職業は教師。私立皇南学院の中等部と高等部で美術の教師を務める。

良家の次男で芝浦にある高級マンションで自由気ままに一人暮らしをしていたが、両親から強引に住み込みで身の回りの世話をするメイド（A子）を送りつけられる。

好みは巨乳で顔や性格は二の次。基本、物事にあまりこだわらないサッパリした性格のハズだが何故かA子相手にツッコミが激しい。

A子が来て早々、部屋に隠していたマイ・フェバレット巨乳エロ本を焼き捨てられた事から「**この女は敵**」と認識している様子。

でもゲームの話になると意気投合するので何とか主従関係を維持出来ている。

ゲームが好きでヲタクの域にあるが、だが腕はいまいち。カッとなって壊した携帯ゲーム機は数知れず。

ゲーム好きだがエロゲーは苦手。自室で表情も変えずにエロゲーをプレイするA子に困惑する事もしばしば。

・A子

.....本名不明。というか名乗らないのでご主人様も知らないまま。

黒髪のロングヘア。小柄で三白眼、貧乳というか幼児体型。年齢も不詳だが、大学は卒業しているとの事。運転免許証によれば24歳。

才媛で勝ち気な性格。辛辣な口調故に、ご主人様と衝突する事もしばしば。

家事能力は完璧だが、限度を考えない行動が多く、無駄な料理を作ったりして失敗する事も。

体型コンプレックスから巨乳を敵視し、ご主人様の部屋で巨乳のエロ本を見つけてしまった事から「**この男は敵**」と認識している様子。

しかし、ご主人同様ゲーム好きで、ゲームの話になると意気投合する。それ以外でも割と最近では意見があっている様子。本質は実は似たもの同士。

コレクター的な面が強いが“集める”行為が目的である為、入手したゲームに対する執着力は意外にも無い。

その為、遊ばなくなったゲームはネットオークションに良く放出している。

またムツリスケベな性格で、エロゲーにも抵抗なく接する事が出来る。

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

「ご主人様、先日の中秋の名月で思い出したんですが」

「何を？」

「歌でありますよね、『月がとっても青いから以下略』」

「エライ古い歌だなオイ」

「私、その“青い月”って見た事ありません」

言われて、ご主人様は仰ぎ、

「...言われてみれば俺も無いな。白か、赤っぽい奴だけだな」

「青い月で検索するとブルームーンという言葉がヒットします」

「カクテルであるな、バーで口説かれた女性がお断りを暗喩する為に注文する奴が」

「経験ですか」

「無いわい」

「ブルームーンは一般に、ひと月に2回満月が起きた時に、その2回目の満月を指しますが、決して月が青いワケじゃないのですね」

「でも青い月って事は観た奴が居るってわけだろ」

「はい。稀に、大気中の塵の影響で月が青く変色して見えるとか。

主に、噴火があった地域で観測されるそうです」

「確かに都会じゃ観られんわな」

「と言う事は、ですよ」

「？」

「作詞した清水みのるは噴火が起きた地域でそれを観たんでしょうか」

「そうきたか」

「あの歌の歌詞は“遠回りして帰ろう”とありますが、

つまり噴火が起きたから遠回りせざるを得なかったと言う事ですよね」

「その発想は無かった、っていうかオイイ」

「しかもですよ、腕を組んで二人っきりで帰ろうとも歌ってます。

あの歌、冷静に考えると一大スペクタクル巨編じゃないんですか?!」

思わず頭を抱えるご主人様。

「……流石に、ここまで考えすぎな解釈は初めてだ。A子あなたは疲れてるのよ」

「更に、その二人は行きずりで知り合ったと。

ますますもってディザスター映画の定番、

主人公とヒロインが極限の状況で出会い愛を育む。

これはもう映画化決定ですよ！」

「誰かっ、頭のお医者様をーっ！」



「ご主人様、トゲアリトゲナシトゲハムシって虫ご存じでしょうか」

「何か最近そのパターンだな、って何その文字数稼ぎみたいな名前」

「ちなみに漢字で書くと『棘有棘無棘葉虫』」

「うわっイラッとする、有るのか無いのかはっきりしろ」

「どっちにしても実在しない虫なんですけどね」

「何...だと？」

「詳しい事情は判らないのですが、トゲナシトゲハムシという実在の虫がいて、ある文献での解説の中で件の虫が言及されていた事から、この虫の存在が注目される事になりました」

「でもソレ、実在しない虫なんだろ」

「はい。学会などでも確認されていないそうです」

「いったいどうしてそんな事に...」

「最初にコガネムシのミニサイズな“ハムシ”という虫がいて、しばらくして棘のあるハムシが見つかった事から、それを“トゲハムシ”と命名しました。

ところが、その種に棘のないトゲハムシが見つかり、“トゲナシトゲハムシ”と命名される事になりました」

するとご主人様は傾げながら

「……ただの、ハムシ、じゃないのソレ？」

「私もそうとは思いますが、何故か分類上、別種と言う事に」

「学者って時々理解に苦しむ事やるけどさあ...」

「しかもそこへ、棘のない件の虫の存在が語られるようになり、
便宜上それを“トゲアリトゲナシトゲハムシ”と命名したようです」

「.....思うんだけど、学者混乱してね？」

「私もそう思います」

「そのうちアレだ、トゲアリトゲナシトゲハムシに棘の無い新種が見つかって、

『トゲナシトゲアリトゲナシトゲハムシ』って名前になるんじゃない」

「更に棘の有る新種も見つかって『トゲア』

「もういい、きりが無いわソレ。何で分類し続けるのかね...」

「新種発見の名声を無視出来なかったんでしょうね、ムシだけに」

「オイオイ」

「前々から気になっていたんですが」

「？」

「ご主人様の趣味って何ですか？」

A子に訊かれて、ご主人様は暫し仰いだ。

「.....趣味らしい趣味ってのは無いなあ。授業の準備とかで忙しいし」

「ゲームは違うんですか？ 一応全機種集めておられますけど」

「まあ全部有ると面白そうなゲーム出た時便利だし」

「その割には P S P 壊しますね」

「いや、あれはモンハンでエキサイトすると...」

ご主人様は苦笑いし、

「ほら、熱くなってマウス投げつけるってのがあるだろ。アレと同じ」

「マウスは安いですけどね」

「痛いところ突くなあ。そういう A 子はどうなんだよ」

「私は壊しませんよ」

「そうじゃなくて、趣味のほう」

「？」

「ゲームが好きみたいだけど、趣味って程じゃないんだろ？」

「現に、持参したゲーム機は携帯機以外被った分は捨ててるし」

「広く、浅く、がモットーですから」

「それでも何か一つくらい打ち込んでるものがあるだろ？」

訊かれて、A子は暫し傾げる。

「……あるとしたら」

「あるとしたら？」

「ヤーユウ」

「は？」

「だから、ヤーユウ」

ご主人様、暫し仰ぎ、

「……ナニソレ？」

するとA子は意地悪そうに笑う。

「知らないんですか、ヤーユウ。今若いこの間で流行っているというのに」

「い、いや、知らんぞ、うちの学校の学生からもそんな言葉は……」

「あー、それはですねえ、残念な人だからですよ」

「なんだとおっ!？」

ご主人様はA子を睨み付けるが、A子は鼻歌交じりに話を続ける。

「ヤーユウはソレを知っているかで残念な人がどうか判るんですよ。

残念な人はヤーユウの存在すら判らない」

「だから何なんだそのヤーユウって!？」

「知りたければググればいいのに」

「ぐ……」

ご主人様は悔しそうな顔で自分のPCを立ち上げた。

「やーゆう、っと……くそっ、何だコレは、ヒットしねえ！」

意味不明な言葉の羅列以外表示されず、ご主人様は焦り始める。

「ほほほ、足搔いてる足搔いてる」

「う、うるさい、ヒントくらいよこせ！」

「ヒント欲しがるなんてやっぱり残念な人」

「ぐぬぬ」

ご主人様は意地になって検索を続けた。

「何なんだ、ヤーユウって...？」

ご主人様は唸りながら検索を続けるも、一向に正解にたどり着けなかった。

「.....まさか、からかわれ.....あ？」

ご主人様はふと、ある事に気づく。

そして今、脳裏を過ぎった言葉で検索してみた。

「擲揄う.....からかう、を漢字で書——ええっこっ！」

A子は既にその場から去った後だった。



「ご主人様、今某女芸人がエベレスト登頂を目指していると聞いて、私も登山をやってみたいと思うのですが」

「これまた唐突な」

「でも最近流行なんですよ、山ガールという言葉知りませんか？」

「いや……しかし登山かあ、小学生の時に箱根の金時山に登ったきりだよ。何処に登る気なんだ？」

「天保山です」

その名を聞いた時、ご主人様の顔に緊張が走る。

「……その山は……駄目だ、危険すぎる」

「危険？」

A子の顔が強ばった。

「そこはそんなに危険な山なんですか？」

「ああ。……何も知らずに軽装で登る無謀な輩に絶対的な絶望を与え、
ベテランでさえ一歩間違えれば牙を剥く、
魔の山と言われているだぞ」

A子は思わず息を呑む。

「そんな恐ろしい山だったとは……」

「他にもなあ、切り立った斜面に登山家を絶望する愛宕山や、
魑魅魍魎が群れをなす高尾山や、あと……」

「……」

「何その冷めた顔」

「……ノリがいいのも考え物ですね」

「う、うっさいっ！」

なお、天保山とは大阪市にある、標高わずか4.3メートルの日本一低い築山の事である。

参考リンク： Wikipedia 天保山

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A9%E4%BF%9D%E5%B1%B1>



日曜の夕方、それは突然やってきた。

「……何この気配」

掃除機で掃除中だったA子は、玄関から届くその奇妙な気配に気づき、面を向けた。

「……誰？」

掃除機を置き、A子は玄関に向かう。

「誰か来たのか？」

台所から缶ビール片手に出てきたご主人様は、A子の様子に気づいて聞いてみた。

「……敵です」

「……敵って、おい」

「敵です」

ご主人様に聞かれても、A子は玄関に向いたまま素っ気なく答える。

「変なセールスマンでも来たって事か」

「そんなもん敵のうちにも入りません。余裕で蹴散らします」

「蹴散らすって……」

「いいからそこでお待ちを」

「お、おい」

ご主人様は慌ててA子を追いかけた。

A子は玄関のほうを険しい顔で睨んでいた。

「穏やかじゃないなあ」

ご主人様は肩をすくめる。

「何せ、敵、ですから」

「つーか、そもそもここは1階の玄関でロックされてて、部外者が立ち入り出来ないだろが。

ただのご近所様だろ、まったく」

「あ、待って下さいご主人様」

A子が止めるが、ご主人様は普通に玄関の扉を開けた。

そこに立っていたのは、一人の黒髪の少女だった。

「どちら様で？」

ご主人様は不思議そうに訊く。

ご近所だと思っていたが、どうにも記憶が無い。

どこか物憂げな面差しの少女は、ご主人様の顔をじっと見つめたまま黙っていが、やがて穏やかな笑みを浮かべてこう言った。

「.....あなたをご主人様ですね」

「え？」

「やっぱり、敵！」

A子が少女を指して言う。

身長的事もあろうが、気のせいとその指先は顔ではなく、少女の豊満な胸を指しているようであった。

「知り合いか？」

「巨乳に知り合いなどおらんっ！」

A子の説得力ある返答に、ご主人様思わずうなずいた。

「このマンションの人？」

訊かれて、少女は横に傾げた。

「私も見覚えがありません」

A子は少女を睨んだまま言う。

「えーと」

ご主人様は困った顔で頭を掻き、

「部屋、間違えてない？」

「間違えてません」

凜とした声で少女は答えた。

「私もお主人様のメイドですから」

思わず固まるご主人様。

この来訪者が、平穏な生活に新たな嵐を巻き起こすなどとは、この時の二人には知るよしもなかった。

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

(第3巻「上野動物園編その2」より続き)

フードコーナーで一息ついた二人は、西園への近道だったシロクマ舎の北側の通路が改装工事で通れない為、反対側の通路へ迂回した。

急な坂道を登っていくと、右横に

「熊がいますね」

「ここは熊の檻が集まっているんだっけ。マレーグマかここは」

「少し先にツキノワグマやヒグマの檻もあるみたいです。観てきます？」

「いや、いい加減暑いし、先行こ」

アイスで少し涼んだとはいえ、相変わらずの異常気象の強い日差しに、ご主人様はうんざりする様な声で言った。

坂を登ると、動物慰霊碑とゾウ舎の間に出た。

「ゾウが見えます」

A子が指した先には、大きなガラスがはめられた観察コーナーがあった。檻の中では数頭のゾウが水浴びをして涼を求めている。

「ゾウも暑そうだなあ……」

「先進みましょう。西園のほうに木陰が見えます」

二人は、水浴びをするゾウたちのいる檻の前を抜けて、ニホンザルがいる猿山の前に出た。



「動物園の定番だな、猿山」

「日本初なんですよねここ」

「ああ。確か戦前からあるんだよな」

動物園のビジュアルで最も多く描かれた場所は猿山と言っても過言ではないだろう。

上野動物園の猿山は、昭和6（1931）年に作られた、園内で最も古い施設である。

ここでは多くのニホンザルが飼育されており、ここをモデルにして国内の動物園で多くの猿山が建造されたのだった。

「この猿山。昔はなんて呼ばれていた知ってるか？」

「なんです？」

「『猿ヶ島』。山とは言うが、むしろ島みたいに見えるだろ？」

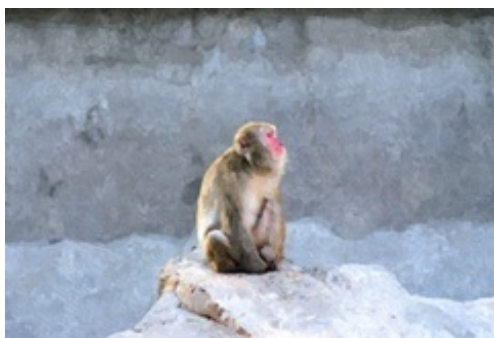
「言われてみれば……」

檻の中央に築かれたその小山は、堀を海に見立てると確かに島の様であった。

「堀に水が張ってあれば猿ヶ島って呼ばれ続けたんだらうけど、結局山のイメージが強くて『猿山』と呼ばれる様になったのさ」

「へえ」

A子が感心して猿山を見ていると、ご主人様が猿山のある一角を指した。



「あの一番高い所に一匹、いるだろ」

「いますね」

「あれがこの猿山のボス猿だ」

「てっぺんにいるから分かり易いですね」

「でも実は偉いから高い場所にいる訳じゃないんだ」

「？」

「猿の習性さ。ボス猿は本来、群れの中心に居座る。猿山のてっぺんがそれに位置する。だからあそこにいるんだ。でも人間社会の格差をピラミッドに見立てるように、みんなお偉いさんはてっぺんにいるモノと思って勘違いしちゃうんだよな」

「高い所だと見渡しやすいつもってましたが」

「それはあるだろうけど、逆に目立ってしまう。ここは外敵がないから安心して居座ってられるんだろうけど」

「ふーん。ご主人様、よくご存じで」

「猿山は絵画や撮影の良いモチーフになるからな。生徒に手頃な写生場所として勧める時の小ネタで調べた事がある」

「なるほど。だらだらと教えているのではないのですね」

「最近の学生はウケないと食いついてくれないからなあ……ってオイ」

ご主人様はノリツッコミを入れるが、A子は叱られる前に既に先に進んでいた。

「あ、モノレール」

立ち止まったA子は正面の木陰に隠れる様にある施設に気づいた。

「『上野懸垂線』だな」

「へ？」

「そのモノレールの正式名称。動物園のアトラクション施設じゃなくて、東京都交通局の運営する立派な交通機関だ」

「マジで？」



思わずA子がガン見する。

「日本で最初に開業したモノレール線さ。ドイツのランゲン式という懸垂式のモノレールを参考に、車輪をゴムタイヤに変えた車両を使って、故に『上野式』とも呼ばれている。

湘南にある『湘南モノレール』や千葉の『千葉都市モノレール』も同じ懸垂式だが、あちは車輪で駆動している。世界でもかなり特殊な交通機関と言えるな」

「タイヤで走るといって、うちの近所にある『ゆりかもめ』や日暮里の『舎人ライナー』もそうだった記憶が」

「新交通システムと呼ばれるモノは不思議なくらいゴムタイヤで走ってるよな。この『上野懸垂線』は新交通システムの元祖と言えるかも。折角だから乗ってみるか」
「いいですねえ」

二人は駅舎に入り、切符を買って中に入る。

車両はまだ西園のほうにあるらしく、設置されたベンチに座って他の客とともに到着を待った。

まもなくモノレールの車両が戻ってきた。

反対側から降車客が出終わると、二人がいる側の扉がゆっくり開いた。

乗車すると車内は大人の身体にはやや狭い様にした。

「そう言えば私、これに乗った覚えがありません」

「俺は何度も乗ったよ。子供の頃は気にしなかったけど、大人にはちょっと狭いなこの車内」

ご主人様はガリバーになった気分です苦笑いしながら車内を見回していた。

やがて扉が閉まり、モノレールが発車する。

懸垂式ではあるが走行中はほとんど揺れなど感じさせないスムーズな走行だった。

茂みを進み、二人が回っていた東園とこれから訪れる西園を繋ぐ『イソップ橋』を左側でかすめる様に抜けると終点の西園駅に到着した。所要時間、たったの2分の旅であった。

「あっさり着きましたね」

「ぶっちゃけ歩いていった方が早いけど、まあ風情と言う事で」

二人は西園駅から出てきた。

するとA子は正面にあるモノを見つけた。

「ペンギンがいますね。東園のシロクマ舎の近くにいたペンギンがこっちに引っ越ししていたのでしょうか」

「俺の記憶では昔からここにもいたような」



「言われてみれば、私も子供の頃、両方で観た記憶が……ソレは兎も角、やっぱりペンギンは人気者ですね」

ペンギンが沢山いるプールの前には、親子連れの客が沢山集まっていた。

「あのよちよち歩きが可愛いからなあ」

「でもペンギンって極地に棲んでいるんですよね。こんな土地で暑くないんでしょうか」

「ペンギンって赤道直下にも棲んでいるんだが」

「え」

思わず瞠るA子。

「ここにはいなかったかなあ、ガラパゴスペンギンがそうなんだが。何かの本で読んだが、飼われているペンギンの大半が日本にいて話らしいし、寒冷地じゃないと棲息出来ないという訳じゃなさそう。……とはいえ流石にこの暑さは堪らんようだ」

ご主人様は、日陰に固まっているペンギンの群れを見て苦笑した。

「さて、あとはこの辺りだけになるが、問題のマヌケネコ……」

「マヌルネコです」

「そうそう、そのマヌルネコはどこにいるのやら」

「東園では見かけませんでした。あっちのほうですかね」

A子は右のほうを指す。そこには大きな檻がいくつかあった。

「奥の方に麒麟やサイ、カバがいるんだよな、西園は」

「ここですかね？」

A子はパンフレットを取り出し、西園の地図内にある『小獣館』を指す。すると、あれ、と呟いて傾げた。

「どうした」

「なんですかこの『ハシビロコウ』って」

フラミンゴやナマケモノ、カンガルーと言ったお馴染みの動物たちの中に、A子は聞き慣れぬ名前を見つけた。

「ああ、これね。見た事無いのか」

「どこかのオヤカタサマ？」

「ハシビロ公なんて戦国武将おるかいつ」

「ご主人様は知ってるのですか」

「こいつは面白いぞ。ちょっと寄ってみよう」

ご主人様はA子を連れて、小獣館へ向かう道の更に向こう側へ回った。

サーカスのテントの様な形の檻の反対側に回ると、A子はそこにある檻の中に奇妙な物体を見つけて驚く。

「……何かいる」

A子はもう一度、凝らしてその物体を伺う。

「あの……なんか……凄い目つきの悪いのが……こ
っち……みてる……じっとしたまま……」

「あれがハシビロコウだ」

「え？」

「怖いだろ」



A子は怯えた顔を縦に振った。

「……ガチで怖いんですけど。あの動かないのが動物なんですか？」

「“動かない鳥”で知られている。でかくて微動だにしない上にあのツラだ、人によっ
ちや泣き出すかもな」

「鳥が苦手な人には極北の存在ですね、あれは……」

「でも愛嬌あると思うんだけどな、あの顔」

「いやいやいや……」

どうやらA子はこの手の存在が苦手の様である。

「次、次行きましょ」

A子のご主人様の手を引っ張って先を進んだ。

ハシビロコウ舎の反対側には、キリン舎やシロサイ舎があった。動物園ではライオンやゾウ、サル山と並んで馴染みの光景である。

ふと、A子がある事に気づいた。

「そういやご主人様、チンパンジーって見ましたっけ？」

「いや……いなかったなあ」

「西園のこの反対側にはいないと思うが……」

ご主人様は動物園の入口で取っていたパンフレットを開いた。

そして園内にいる動物のリストを見て、おや、と呟いて傾げた。

「あれ、いない？」

「パスポート持ってる割に余り知らないんですね」

「昔作って、単純に更新しているだけだから、最近は無沙汰なんだよ」

「リストからもれてるんですかね」

「端末か何かで調べられない？」

「このコミュニケーターでは無理っぽいですね。スマートフォンで見てください」

A子はポケットから取り出したスマートフォンのブラウザでネット検索を開始する。

そしてしばらくして、溜息まじりに呟いた。

「今、上野動物園にはいないみたいですね。他にもダチョウとかも」

「何故？」

「ハッキリは分かりませんが、どうやら動物保護の観点で、分散ではなくまとめて飼う為のようです。今は多摩動物公園に集められてるらしいですね」

「そうなんだ。ちょっと残念だな。パンダもそうだが、動物園に行けば全部観られるモノと思ってたのに」

「野生の動物が減っているって話ですからね。

動物園は今や、見せ物から、生態や保護の為の研究の場になっています」

「そのうち、こんな風にキリンやサイが観られなくなってしまう時代が来るんだろうか」

「来ない、と言いきれないのが哀しいですね」



二人はエサをもりもり食べているキリンを観ながら一抹の寂しさを覚えていた。

その後ゆっくりとサイ、カバ、アシカそしてシマウマ舎を観て、先ほどスルーした小獣館の前に着いた。

「残るはここと向こうのは虫類館か」

「流石には虫類館には居ないでしょうから」

「ここで間違いなさそうだ」

二人は小獣館の中に入った。

館内はやや薄暗い照明が使われていた。

「ここにいる小型の動物は夜行性が多いそうですね。あ、ハダカデバネズミ」

「あの不細工なピンクのネズミだな。上野動物園にも居たのか」

小獣館に入って直ぐ左に、そのネズミが飼われているアクリル槽があった。

地中の巣を再現しているその中では、ピンク色の毛のない、その名の通り裸で出っ歯のネズミが忙しく動き回っていた。

「キモいですね」

「キモカワって奴だな。まあ俺もキモい派だな」



ハダカデバネズミ槽の先の通路の中央、ミーアキャットが飼われているアクリル槽があった。

アクリル槽の中はミーアキャットの生息地である砂漠を再現しており、その中で数匹のミーアキャットが動き回っていた。

それを横目で見ながら、二人は奥にある、ガラス窓が貼られた檻の前に来た。

「——いた」

A子が素っ頓狂な声を上げる。そして、ダダッ、と走り出してガラス窓に張り付いた。

「まーぬーるーねーこーおーっ」

ご主人様は頭を抱えつつ、その後を追った。



「……なんだこれは」

檻の中にいるそれを見て、ご主人様は酷く困惑した。
。

「ただのネコじゃねえか……」

そこにいたのは、岩壁を模した内壁で覆われた、薄暗い檻の中で丸まっている毛玉のようなアメシヨ一の猫であった。

「しかも氷の塊で涼んでやがる」

毛玉は、床に置かれていた氷に張り付いていた。

「まあ、暑いからなあ……」

「まーぬーるーまーぬーるー」

「駄目だこの女何とかしないと」

ご主人様はかぶりつきになってる A 子を掴み上げた。



「落ち付け」

「まーぬーるー」

A子のご主人様に持ち上げられたままじたばたしていた。

「思ったほどブサイクじゃないな」

「あれは王子動物園の子でしょ。こっちは意外とラブリー、はあはあ」

檻の中でマヌルネコが大きなあくびをした。それを見て更にA子が興奮する。

「あはは……」

ご主人様は仕方なく降ろすと、またA子がかぶりつきになる。あまりの執着ぶりにご主人様は苦笑いしながら生暖かい目で見守るしかなかった。

1時間ほどかぶりつきになった所でとうとうA子は力尽きた。

ご主人様は呆れながらA子を抱えて小獣館を出てきた。

「まーぬーるーまーぬーるー」

「ったく。かぶりつきで興奮して力尽きたアホは初めて見たわ」

「だってかわいいんですものーうーふーふー」

普段は無愛想なA子が、野生の猫にメロメロになっていた。
これはこれでちょっと不気味だなとご主人様は思ってしまった。

「そんなに猫好きなら飼えばいいのに」

「実家ではお祖父様が飼ってた猫と遊んでました」

「へえ。猫好きなのか」

「そりゃあもうっ！ あんな弄り甲斐のある生き物なんて滅多にいませんっ！」

遠くの空の下、A子の実家の屋根の上で寛いでいた黒猫がくしゃみした。

「しかし予想外に可愛かったのでビックリです。もっと不細工なのを期待していたのに」

「お前は猫が好きなのか嫌いなのかどっちなんだ」

「好きとか嫌いとかじゃなくて、可愛いんです！」

「なんだそりゃ」

ご主人様は苦笑いした。

「それにしても動物園の猫とは思えないですよ。普通に飼っても誰も気づかないかも」

「そうかなあ」

「いや、確かに潰れアンマンな顔ですけど、ブサ顔は余り珍しくないですし」

「つーか、猫にしては異質すぎる気が」

「異質？」

「なんつーか……、そう、目だ。目が何か変だった」

「目、ですか？」

「調べられるか？」

「試しに」

言われてA子はネットブックを取り出し、検索を始める。

「わあ、凄い。よく気づきましたね」

「何か分かったか？」

「ええ、確かに目が他の猫と違いました。瞳孔が他の猫の目と違い、明るい所でも縦長にならず丸いままで収縮するそうです」

「そう言う事か。顔を見てて何か違うと思ったんだ」

「顔つきといい、目といい、確かに他の猫とは一線を画しているのかも」

「ソレがこの猫の面白い所なのかもな……ふう」

不意に、ご主人様は溜息を吐いた。そして、頬を伝う滴を手の甲で拭うともう一度溜息を吐く。

「しかしいい加減暑いな……」

「そろそろ戻りますか？」

「これ以上は観る所無い様な」

「両生は虫類館は？」

A子は向かいにある2階建ての建物を指した。

そこはその名の通り、珍しい両生類やは虫類が飼われている展示館である。ワニや蛇、カエルなど珍しい種類の生き物が展示されていた。

「確かこの機械、あそこに返すんですよね」

A子は下げていたコミュニケーターを掲げた。

「は虫類か……」

「何嫌そうな顔しているんです？」

するとご主人様は険しい顔をして、

「……俺、蛇が駄目」

「あら」

「餓鬼の頃に、毒蛇じゃないが、噛まれた事があるな」

「面白そうな話ですね」

「お前、何、目を輝かせてんだ」

「そういう話大好物です！」

人の不幸は蜜の味、言わんばかりの笑顔でご主人様を見るA子。

ご主人様は呆れて溜息を吐く。

「とにかく、だ。コミュニケーター返したら入館はしない。観たけりゃ一人で行ってこい」

「はい」

A子は元気に手を挙げ、一人では虫類館に。

数分後、意外にもA子はコミュニケーターを返してきただけで戻ってきた。

「観ないのか？」

「カエルが駄目なんです」

「嘘つけ」

ご主人様は苦笑いした。

「さて、どうするか。不忍池のほうに何かいる様だけど」

「ちょっとそこ寄りましょう」

A子は両生は虫類館の反対側を指した。

そこには大きな売店があった。

「お土産も買うのか」

「東館回っていた時にたまたま目についたモノがあって」

「まあ良いか。職場のお土産にも買っておくか」

二人は売店のほうへ向かった。

不忍池に面したカフェと一体化しているその売店では、動物をあしらえたクッキーやチョコなどの他、動物園のロゴやメッセージをあしらえた帽子やTシャツ、そして動物のぬいぐるみが売られていた。

「これです」

そう言ってA子をご主人様に突きだしたのは、可愛い虎のぬいぐるみだった。

「トラの赤ちゃんぬいぐるみ？」

「そうです」

「ほとんど子猫のぬいぐるみだな……しかしこれは……」

ご主人様はトラの赤ちゃんのぬいぐるみをじっと睨み、思わずサムズアップ。

「この感触……やばすぎる」

ぬいぐるみの頭を撫でぐり回すご主人様。

「でしょ？ 子猫の柔らかさが再現された逸品です！今なら2個ついてきます」

「つかない、つかない」

A子は手に取ったトラの赤ちゃんぬいぐるみを、ご主人様は職場のお土産に動物クッキーを2箱買った。

「いいんですか、代金？」

「いつも世話になってるからな」

「ありがとうございます。楽しかったです、また来ましょう」

「また、というか、年間パスポートあるから1年間出入り自由だぞ」

「そういやそうでしたね。でもこう言う所は一人で来るより誰かと一緒に来た方が楽しいですから」

そう言ってA子はニコリと笑う。

「……？ どうしたんです？」

「あ、いや、なんでも」

ご主人様は思わず目を反らした。

「さ、帰るぞ。不忍池通ってこ、池の中渡れるみたいだから」

「その様ですね、行きましょう」

A子はトラの赤ちゃんのぬいぐるみを抱きかかえながらそそくさと橋のほうへ歩き出した。

そんなA子の背を観て、ご主人様はちょっとホッとする。

お前さんでもそんな顔出来るんだな、と思わず言いかけた自分が、どこか気恥ずかしかった。

上野動物園編 おわり



メイドさんと
ご主人様の
140文字日記